

**概況**：7月19日(土)未明を中心に、北部九州に集中的な豪雨が降り、太宰府では午前4時～5時に時間雨量99mmに達した。このため太宰府市内では、内山・三条1丁目・国分などで土石流が発生。太宰府市内を流域とする御笠川は太宰府市関屋付近などで氾濫、更に御笠川下流でも数箇所でも氾濫した。報道された博多駅前の冠水は、この氾濫被害一部である。また、飯塚市内でも遠賀川流域の氾濫で、市内の繁華街を中心に冠水した。

### 太宰府市の土石流被害

太宰府市国分の土石流被害(2003年7月20日午後4時 後藤撮影)



太宰府市国分の土石流は午前5時少し過ぎた頃に発生。ドンという音がした時には土石流が襲っていた。事前の山地崩壊などは雷と豪雨の音に阻まれて全く聞こえていない。避難命令等は事前にはなかった。背後の渓流には昭和61年完成の砂防ダムが3基あり、この効果で大岩や流木はある程度食い止めている。この写真の宅造地内の道路は渓流出口に直接繋がっており、住宅街の土石流対策工は全く行われていない。電柱も倒壊しており、家屋が一部破損程度の被害で済んだのは不幸中の幸いである。

## 太宰府市三条一丁目土石流



(2003年7月23日後藤撮影)

太宰府市三条一丁目は、1973年にも同じ地点で、ほぼ同じ規模の土石流被害を受けた。被害発生後砂防ダムが整備されたが、扇状地部分の流路工の幅は2 m程度、深さも1.2 m程度でしかなかったことが被害を招いた。今回は崩壊源が四王寺山山頂付近にあり、数万立方m規模の大量の土砂が供給されたものと推定される。

破壊された家屋もあり、死者も1名生じた。前回の土石流の教訓がほとんど生かされておらず、このため被害戸数も増加した。ただ、人的被害が前回より減少したことは、砂防ダムにより巨石の流下量が減少した効果とも推定される。

1973年にこの地点の詳細な被害分布図が作成されていれば、有効なハザードマップ作成に利用できたはずである。現状では扇状地の末端付近に人家が集中し、河川の拡幅は論議を呼びそうである。